（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	はーとらんど			
○保護者評価実施期間	2026年2月25日	～	2026年2月28日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	1	（回答者数）	1
○従業者評価実施期間	2026年2月9日	～	2026年2月28日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	5	（回答者数）	5
○事業者向け自己評価表作成日	2026年3月13日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	衛生的で安全なバリアフリー環境の確保と柔軟な環境設定	バリアフリー構造を維持し、安全に活動できるスペースを確保している。学校の長期休暇時等には個別空間を利用するなど、利用状況に応じた適切な居場所の提供に努めている。清掃や消毒による清潔な空間づくりに注力している。	衛生保持が困難な場面も想定し、清掃・消毒のルーチンを再構築して常に清潔な環境を維持する。今後、利用者数が増加した際にも、個々の特性に応じた「環境設定の最適化」を図れるよう、動線確保や空間活用のシミュレーションを継続する。
2	個別ニーズの精緻な把握と多角的な情報共有体制	モニタリングや送迎時の対話を通じ、本人や家族の意向を汲み取った個別支援計画作成に努めている。日々の申し送りに加え、定例会議を設けることで、職員全員が共通理解のもとで支援に当たれるよう情報共有の徹底に努めている。	アセスメントのさらなる精緻化を推進し、個々の特性に即した目標設定を行う。職員間でのPDCAサイクル（計画・実践・評価・改善）をより組織的に徹底し、会議での議論を深めることで支援計画の質の向上とブラッシュアップを図る。
3	保護者との多角的な連携および安全管理情報の周知	送迎時等の対面報告に加え、電話や写真等を活用して日々の活動状況を具体的に伝達できるよう努めている。苦情対応体制の整備や、新たに「誰が見ても分かりやすい書面に工夫した安全対応マニュアル」を作成・周知している。避難訓練やヒヤリハットの速やかな共有も実施済みである。	タブレット等のICTツールの活用をさらに進め、より迅速かつ視覚的な情報伝達の効率化を検討できるように努めていく。安全管理マニュアルについては、常に最新の知見を反映させるよう定期的な見直しを行い、家族がより安心できる協力体制を強化する。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	活動プログラムの多様化とマンネリ化の打破	現在、活動が固定化しやすい傾向にある。発想を転換し新しいアイデアを出そうと試行錯誤しているが、個人の検討に留まりやすく、チーム全体でのプログラム立案体制が未成熟であることが要因である。	職員チーム全員で意見を出し合い、本人のニーズや興味に合致した多彩なプログラムを組織的に企画・立案する体制を構築する。他事業所の先進事例を研究するなど、多角的な視点から活動のバリエーションを拡充できるように努めていく。
2	地域交流の機会創出と集団活動の促進	現在の契約・利用者が1名であるため、他者と関わる集団活動の機会設定が構造的に難しい。また、近隣住民が事業所を訪れる機会が乏しく、立地条件や周辺環境による交流の制約も課題となっている。	同一敷地内での「夏祭り」等の地域行事への参加を継続し、地域社会との接点を維持・強化する。近隣施設との連携を深化させるとともに、将来的には同敷地内に障害者支援施設が移転する経緯もあるため、集団活動のシミュレーションを事前に行い、協力態勢を整えていけるよう努めていく。
3	独自媒体を活用した積極的な外部情報発信	法人全体の広報紙は存在するものの、事業所独自のホームページやSNS等の活用によるタイムリーな情報発信が不足している。地域住民を招くような独自のオープンな運営も十分に定着していない。同敷地内にて認知症カフェは定期的に実施している。	事業所独自のSNSやHPの活用を本格的に検討し、日々の活動内容や特色を外部へ積極的に公開できるように努めていく。同法人内の事業所でインスタグラムを開設した経緯もあるため、参考にしていく。